

## 閉包原理と懐疑論

神山 和好（茨城工業高専）

懐疑論は認識論にとって重要な論敵である。それは解くべき問題を与える。最近の認識論でよく取り上げられる可能性は、われわれは身体をもった人間ではなく実は電氣的な仕掛けにより生かされている「水槽の中の脳」(Brain in a Vat)であるにすぎないのかもしれない、というものである(Putnam, 1981)。単にそのような可能性があるというのなら何の問題もないが、水槽の中の脳ではないことをわれわれは知らないということから、自分には手や足があることをわれわれは知らない、という極端な懐疑論を導く議論がある。もし自分には手や足があることをわれわれが知らないのならば、たぶんわれわれは窓の外に木があることも知らないであろう。つまりこれは、われわれはほとんど何も知らない、という懐疑論と同じである。

水槽の中の脳（BIV と略）という論理的可能性を使って、自分には手があることをわれわれは知らないことを導く議論は次のものである。

- (1) 自分が BIV ではないことを私は知らない。
- (2) もし自分が BIV ではないことを私が知らないのならば、自分には手があることを私は知らない。

よって

- (3) 自分には手があることを私は知らない。

これは「無知からの論証」(the argument from ignorance)と呼ばれている(DeRose, 1995)。それは、自分が BIV ではないことを知らないということから、自分に手があることを知らないことを導いている。多分、たいていの人は、自分が BIV ではないかどうかはわからないということ認めそうである。しかし、自分には手があるかどうかはわからないことは認めないであろう。上の議論のどこかがおかしいことになる。どこだろう。

近年注目を集めてきたドレツキー(Dretke, 1970)やノージック(Nozick, 1981)の診断は、(2)を支える「閉包原理」(closure principle)－知識の論理的帰結は、論理的帰結関係が知られている場合、すべて知識である－に問題がある、というものである。閉包原理否定を通したかれらの懐疑論批判には支持がある一方で、閉包原理そのものの評価をめくり批判が少なからずある。この発表では、ドレツキー＝ノージックの反懐疑論戦略の翻案を提案する。閉包原理が真偽いずれの場合にも懐疑論者の結論を拒否できることを、換言すれば、懐疑論否定のためには閉包原理の真偽を決定する必要はないことを、述べる。